

清須市はるひ絵画トリエンナーレ　アーティストシリーズ Vol.98

福嶋さくら 展 正夢

2022年2月11日(金・祝)—3月6日(日)

清須市はるひ美術館

—————

福嶋さくら　Fukushima Sakura

1987年　熊本県生まれ

2010年　武蔵野美術大学 造形学部 油絵学科 卒業

2012年　武蔵野美術大学 大学院造形研究科 美術専攻 油絵コース 修了

個展

2017年　『一編』WHITESPACE ONE／福岡

2016年　『あしたはさかのぼる』U39プロジェクト　つなぎ美術館／熊本

主なグループ展

2021年　『Kyushu new art』博多阪急／福岡

2018年　『佐野直・福嶋さくら 二人展』ギャラリー尾形／福岡

2017年　『美の鼓動 九州 クリエイター・アーカイブ vol.2』九州産業大学美術館／福岡
『MABOROSHI EXPERIMENT- マボロシ実験場』佐賀

2016年　『シークレット・ドア』Tir na nog gallery／東京

2015年　『2015 イチハナリアートプロジェクト』沖縄
『毛布にくるんであたためる』Gallery01／大分

主な受賞歴

2021年　清須市第10回はるひ絵画トリエンナーレ 大賞

2019年　第5回宮本三郎デッサン記念大賞 入選

2013年　奄美を描く美術展 入選

レジデンス

2017年　MABOROSHI STAY(TAKEO MABOROSHI TERMINAL) 佐賀

2014-2016年　清島アパート (BEPPU PROJECT) 大分

記憶とは不思議なものだ。大切なことほど忘れてしまったり、逆にどうでもいいようなことが妙に頭に焼き付いて離れなかったりする。後から調べてみると覚えていることとは全然違う内容だったりもするし、思い出は枝葉末節が省かれなぜか美化されていく。

記録は、人間のそのような曖昧な生理を克服するために生み出された手段だ。文字や写真といった媒体を使って、私たちはできるだけ客観的に出来事を把握しようとする。しかしいずれにしろそれらが人間の行為である限り、「私」というフィルターから逃れることはできない。どんな言葉を使って、どんな場面を切り取るか、すべては「私」の匙加減なのだ。

絵を描く行為もまた一種の記録であるといえるが、自らの記憶の断片を手掛かりに制作する福嶋さくらの場合、時間の経過による記憶の変質をそのまま受け入れ、さらにそれを独自の表現で具現化することで、過去や未来を「今」に定着させる。どこかメルヘンチックで夢想的な光景は、故郷の記憶や日常生活でのふとした出来事をきっかけに福嶋のなかで醸成された世界だ。

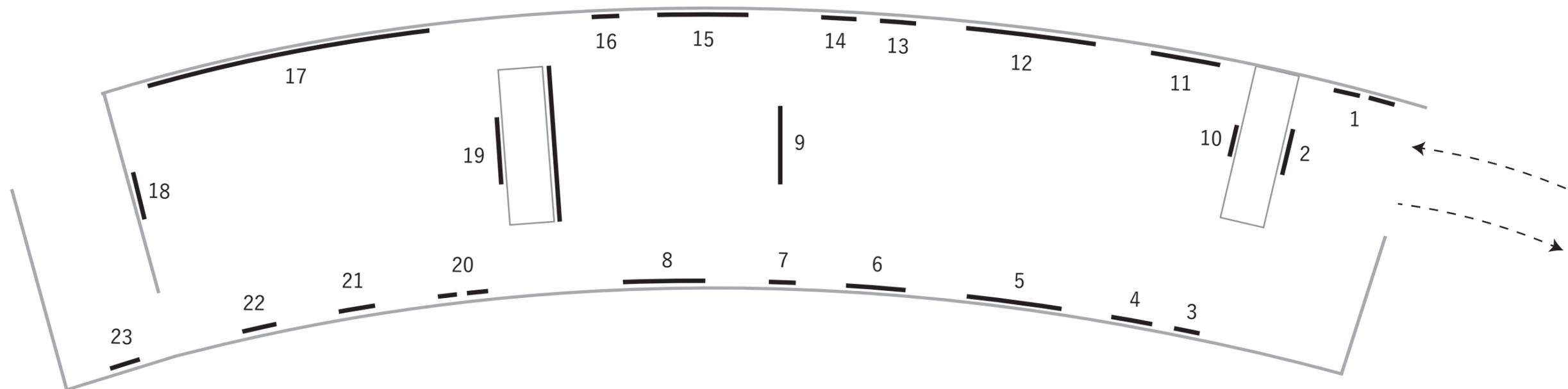
さて、当然だが記憶や思考は触れることができない。生い茂る植物の隙間から見る向こう側、窓越しの景色、垣根、格子、舞台の書割といったモチーフは、境界で隔たれた異なる世界、いわば彼岸と此岸を想起させる。現実そのものとは異質な、福嶋というフィルターを通して（「ろ過」して）みた風景であることのあらわれであるのかもしれない。

しかし、彼女はこうした自身の記憶や思考を「所有」したいという。絵画として可視化すること自体が触れられないものを所有することにつながるわけだが、福嶋の作品における刺繍や影の表現がここで重要な役割を果たす。ささやかにほどこされた刺繍は投影されたイメージを物理的に貫き、より強固に留めおく。また作品を完成させる最後の印だという「影」を描くことで、そのイメージが実体化する（幽霊や虚像には影がない）。

にじみを効かせた鮮やかなグラデーションは、緻密な刺繍とは対照的におおらかな印象を受けるが、綿布の柔らかさを保つために絵具を塗り重ねることをせず、先に描いた部分を避けながら計画的に色を載せていく。むしろ刺繍のほうが自由に糸を重ねていくのだという。塗り重ねないことで明るい発色が呈されていることに加え、背景などにみられる色彩のラインの心地よさも見る者に清涼感を与える。「大きなストロークで筆を思い切り動かしたい」という、素朴で切実な「描く喜び」を日常的に制作のモチベーションにしているからこそ、すがすがしさがストレートに伝わるのだろう。

福嶋が描く世界はごく個人的な記憶が源となっているが、どこかで見たことのあるような身近なモチーフや風景は普遍的でもある。私たち一人ひとりがもつ記憶と結びついて、思いがけない思考が紡がれることもあるだろう。そもそも鑑賞行為も主観的なものだ。他者が考え生み出したものを「私」というフィルターを通して感受する。個々のフィルターの数だけ、美術作品は万華鏡のように異なる世界を映し出す。

（清須市はるひ美術館　奥村綾乃）



過去の記憶の断片や、その断片から想像するまだ見ぬ未来の景色を描いている。

頭の中の記憶は時間の経過と共に変化し、知らぬ間に色や形を変えて全く新しいものになっていたりする。

自分の中で曖昧に変化した日常の一瞬を見つめ直し、形を与え直すことが絵を描くことであり、その像を定着させるように糸を縫う。

福嶋 さくら

1 my view, your view

アクリル、糸、綿布
72.7×53.0 cm ×2点組 2022年

2 stand around

アクリル、糸、綿布
60.6×72.7 cm 2021年

3 confirm

アクリル、糸、綿布
31.8×41.0 cm 2021年

4 10 years later

アクリル、糸、綿布
50.0×60.6 cm 2021年

5 lurker

アクリル、糸、綿布
130.0×162.0 cm 2012年

6 against the day

アクリル、糸、綿布
80.3×100.0 cm 2018年

7 basic pattern

アクリル、糸、綿布
31.8×41.0 cm 2012年

8 blue background

アクリル、糸、綿布
112.0×145.5 cm 2012年

9 in paradise

塩化ビニール、糸
90.0×90.0 cm 2022年

10 crowd

アクリル、糸、綿布
45.5×53.0 cm 2021年

11 stare

アクリル、糸、綿布
89.8×145.6 cm 2015年

12 symbolic compression

アクリル、糸、綿布
130.3×162.0 cm 2016年

13 break apart

アクリル、糸、綿布
65.2×91.0 cm 2011年

14 music

アクリル、綿布
65.2×65.2 cm 2016年

15 stolen landscape

アクリル、糸、綿布
162.0×130.3 cm 2021年

16 glimpse

アクリル、糸、綿布
41.0×53.0 cm 2017年

17 signal

アクリル、糸、綿布
112.0×486.0 cm 2022年

18 float

アクリル、糸、綿布
53.0×53.0 cm 2021年

19 minority

アクリル、糸、綿布
100.0×100.0 cm 2021年

20 eyewinker

アクリル、糸、綿布
41.0×31.8 cm ×2点組 2016年

21 our map

アクリル、糸、綿布
41.0×31.8 cm 2018年

22 epilogue

アクリル、糸、綿布
45.5×53.4 cm 2018年

23 superimpose

アクリル、糸、綿布
27.3×27.3 cm 2021年